

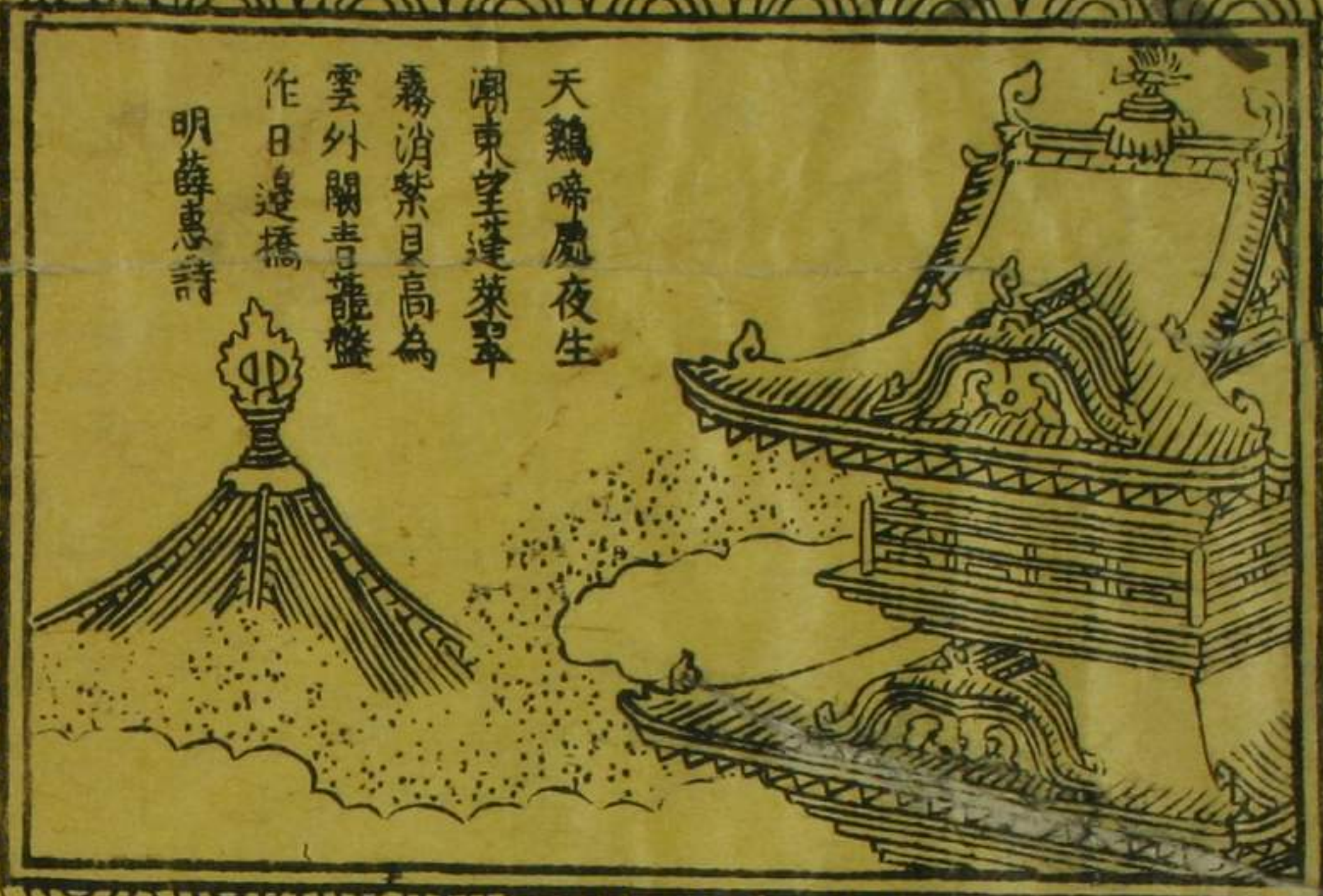
新鑄

椿説弓張月

續編
卷壹

13
2945
13





天鷲啼處夜生
潮東望蓬萊翠
霧消紫貝高為
雲外關寺龍盤
作日邊橋
明薛惠詩

鎮西八郎
為朝外傳
一帙六冊

椿説弓張

月續篇

曲亭主人著 群鳳堂梓
葛飾北齋画 群玉堂梓

昭和九年
七月九日
購求

曲亭馬琴撰



鎮西八郎為朝外傳椿説弓張月續編

拾遺考證

琉球國ハ薩摩手の南ヨリ。三十六町と一里と定めて。舟行百四十里。その地南北ハ長五六十里東西僅二十里。不過と云。三才圖會の説。古琉球ニ呼

て。於幾乃志麻とも。平判官康頼入道鬼界嶋。瀆されて。詠歌。薩摩手方沖の小嶋。ふ。これのりと親。あ。八重の潮風。

源平盛衰記卷の七。載。記者の云。薩摩手方。と。八總名。之。鬼界。と。十二の嶋。な。れ。や。五嶋七嶋。と。名。付。り。五嶋。ハ。日本。よ。後。へ。り。云。云。予。推

量の説。を。り。て。い。り。あ。れ。ハ。大洋の沖。あ。の。く。琉球を。い。欲。小嶋。其。屬。嶋。の。鬼界。之。傳。信。録。琉球。三十六嶋の圖説。を。閱。と。奇。界。亦

名。鬼界。去。中山。九百里。六町。定。為。琉球。東北。最。遠。之。界。人。以。手。食

さうまは
あつさし
まの備
これハ
をのこ
をのこ

多々黒色云云と云えり。かれば鬼界に琉球の属嶋と詠ふりあやこ
 おほし。又神代紀小海宮海郷とあれは琉球のりなるべしは琉球談
 お注せられり。下は世俗龍宮と云海神の都なる処あり洋中波底別
 金殿玉樓ありと云えり。既して謝在杭が五雜俎論破又
 蟠龍子が俗説粹難し。愚按ざる龍宮の琉球也。本朝怪談故事
 小云琉球神道記小云琉球國の王宮は榜とるに龍宮城と書袋中
 の曰是城とるこれハ琉球と云龍宮の義あり。音通ざるゆゑ歟。この國
 東南に在り。水府の内は極深の底とる龍宮と云とも故あれ哉
 天龍地龍の社あり。是を天妃と云。今異國人の菩薩と稱するハ
 是ことなり。今試ふこれハ据ざるこれハ神代紀小所謂海宮と琉
 球のりなり。今試ふこれハ据ざるこれハ神代紀小所謂海宮と琉
 球のりなり。今試ふこれハ据ざるこれハ神代紀小所謂海宮と琉

姫を娶て海宮小苗して住まふと云。そのら豊玉姫。女等玉依姫と
 將風波を冒して海邊小来到方産小化して龍となれ條下ハ考合
 ころ小傳信録中山世鑑を引く琉球開闢の祖を阿摩美父といふ三男
 二女を生む。長女は君々。二女を祝くといふ。一人ハ天神となり。一人ハ海神と
 なる。といふを胎合と云。神代紀小ハ海神ハ阿摩美父豊玉姫と
 君々玉依姫と祝くおりといふも。その義遠くは且豊玉姫を龍と
 化し。海途を因て去り玉依姫ハ苗りて見鷓鴣草青不合尊。養
 育さるるせしむ。一人ハ天神となり。一人ハ海神となり。とある。
 中山世鑑の録小よくあり。亦同書云。琉球始名流虬。隋使羽
 騎尉朱寬至國于萬濤間。見地形如虬。龍游水中。故名徐
 葆光云。隋書始見。則書流求。宋史因之。元史曰。瑠求。明洪



琉球全圖
 中山間切十六
 中山間切十二
 山北間切九
 記トス
 記トス
 記トス

春
 夏
 秋
 冬

春
 夏
 秋
 冬

武中改琉球としたり。かれが邦を琉球を宇宙麻乃文介又於
 幾迺志麻とほび彼処の土人。ふつうもその國を稱して屋其惹のひ
 又流虬ともいふ唐山もて階の対じりて流求と號する。元の時
 瑠求と書明の洪武年中より。亦琉球と更なるを受く。今ハハ
 琉球と名。その國の形龍の水中に浮むがごとくをりて流虬名
 づかれハ中葉その王宮龍宮とも稱する。龍宮ハ和訓みち
 角を龍宮。又和名鈔ハ水神を美豆知と訓む。又水神の女
 象罔女といふ神代紀に云えり。これハ縁故をりて推して大
 古ハハ海宮今俗の稱ハ龍宮城と云琉球のゆとある。抑彼
 國ハ北極地を由ること二十六度二分三釐暖氣他國ハ勝と云
 正月ハ桃の花開枇杷熟十二月ハ氷あり蚊声を收む。傳信録

月令の條下ハ云えり。その風俗年中行事ハ近曾琉球談と
 いふハハ中山傳信録ハ畧解ハ琉球事略琉球聘使記中山世
 譜定西法師傳ハの説をまじりて記されて粗世俗のありと云
 らる。その編ハ為朝琉球ハ漂流。その子舜天ハ彼國
 ハ王ハハ速くハ更ハ蛇足の辨をりてのハ琉球國ハ
 三省あり。中山ハ中頭省。山南嶋崖省。山北國頭省。こ
 三省の屬府とて二十七。これを間切と稱す。間切ハこの方
 郡縣の類なるべし。首里をりて王宮と。恩納をりて五嶽の首
 その圖説のどハハ傳信録ハ云えり。この編の列傳ハハ彼書
 載るハ人物ハ拔萃して私ハ名ハ設む。又右ハ圖をハ一張ハ
 同書のハ。莫ハ寫ハ云えり。のハ云。

海上幡花
重結子
月中丹桂
又生枝

舞天王源尊敦



昨夜深
園雪第
寒兒不
上庭前
看玉樹
賜斷忙
連枝

孝子龜



孝子龜

松影映
池龍戲水
梅花落地
蝶翻風

直野灣真鶴

春鏡弓長月讀全冊卷之二



紫中官南風原親方利勇

曲路幾亭起
野徑
虹樓一帶駕
波濤

藤雲國師



社稷保全縱死芳
 名不墜網常振立
 雖亡生氣攸存

里之子松壽

中城按司毛國鼎



人心生一念天地
 悉知善惡若每
 報乾坤必有私

王妃中婦君



鎮西八郎爲朝外傳椿説弓張月續編摠目錄

第三十一回

爲朝水行赴京

白縫披瀾沒海

第三十二回

忠魂憑鱗救幼主

神仙吹氣甦歿折

第三十三回

毛國鼎忠説破利勇

君真物神出現王宮

第三十四回

寧王女捨身議救民

廉夫人逢妹更悼母

第三十五回

真鶴孝烈赴北谷

國鼎勇敢拉阿公

第三十六回

尚寧王腰輿登高嶺

舊虬山古墳現曠雲

第三十七回

毛國鼎稟命赴小琉球

寧王女捧珠歸龍宮城

第三十八回

一夜夫婦守永訖

鏡中幻術割骨肉

第三十九回

浦添山國鼎逢使者

中山府利勇殺忠臣

第四十回

沃淚松壽擊廉夫人

顯神白縫祐寧王女

第四十一回

松壽月前 歿妻屍

真鶴身後代主首

第四十二回

查國吉仗我戰中城

兩孝子握轎走越來

第四十三回

撈喚阿公棄赤子

流棺鶴龜見亡父

第四十四回

尚寧王戲言喚禍

中婦君惡報見會

第四十五回

挾偽王子利勇聚軍兵

苦赤瀨碑王女逢為朝

統計四十五回其三十回以上出于前後二編

續編六冊 目錄終

拾遺六冊

嗣出



鎮西八郎 椿説弓張月續編卷之一
為朝外傳

東都 曲亭主人編次

第三十一回

為朝水行より京不赴く
白雉瀾波披て海に没む

人皇八十代高倉院の安元二年丙申の秋八月十五日のころに
鎮西八郎為朝と肥後國丹北郡水原の浦より船出して主從僅か
三十餘人潜水華洛に推渡す。清盛を担撃す君父の冤を雪ぐ
とて捕船二艘小乗しりたれ。その一艘あり為朝白雉と名づけ針盤
をとろく。其餘人の郎黨相從し亦一艘あり為朝の嫡男弁天丸
未子丸れいも白雉のありとて大將として八所磔紀平次大夫高間
その母貴たれはとく小幡男と稱す。を大將として八所磔紀平次大夫高間
太郎夫婦。高間が毒をこぼれ傳れ十餘人の郎黨相從す。この日天

よく晴く一矢の雲なく。渺くこれ洋中。波静にして順風。揚るる日。日ハくや入て。月ハ海より。に昇て。頃しも秋の最中。れは金波。谷ハ漏り。玉免浪と走り。汐風いと冷やなり。かくて曉。さにかく。あつた。霧いとぬく。なら。て。咫尺の間も。い。潮ハ引。午の比。及。霧ハ膏とれ。何処の澳。も。音。鷺。似。波の上。群り。お。水面。穢と泡。米糲を散。夥の海蛇。浮。出。松の左右。み。充満。これ。衆皆面。を。さ。當下。為。朝。水と天との景。迹。日。つ。大。驚。白。伊豆の嶋。に。十年の春秋。か。

か。渡海。の風信。自。然。ふ。大。約。南海。を。二。月。清。明。の。地。氣。南。より。北。よ。り。南。風。を。常。と。又。九。月。霜。降。の。後。地。氣。北。より。南。に。く。を。り。て。北。風。を。常。と。し。り。其。の。例。又。此。の。風。の。怒。り。大。風。烈。を。颶。と。い。ふ。又。甚。と。こ。颶。と。稱。し。常。に。起。る。颶。を。漸。り。て。來。る。颶。之。瞬。の。ら。ら。お。發。り。て。條。お。止。と。颶。ハ。一。晝。夜。或。ハ。數。日。止。ま。る。止。ま。る。正。二。三。四。月。を。颶。お。ほ。し。五。六。七。八。月。ハ。颶。お。ほ。し。渡。海。の。北。風。常。お。化。る。あ。れ。も。颶。お。定。期。五。六。七。八。月。ハ。南。風。の。颶。お。り。其。の。風。發。ら。ん。と。北。風。が。至。り。終。て。東。南。又。終。て。南。と。な。り。亦。終。て。西。南。と。な。り。颶。の。こ。じ。め。て。發。

こととたぬおまふうねふび西陣る。そのとら半天あつせん一朵の雲出づ。この
 新虹のごとたぬのあり。これとみ慮あはせあり。又胎あひまの起るとたぬ帆ふのごと
 雲出づ。又半ま天あま不及あじふと。稍鯨さうじやうの尾お似にく。雲うとたぬ。その前まへ
 象ぞう形かたちの蟹かに似にて。南海なんかいは生せいと。十二じふにの足腹あしはらの両旁りやうはうより土眼つちまなこ
 を背せの上うへありて。その口くち腹はらの下したあり。そのり海うみを過する。海うみ
 相負あひあふく背せとし風かぜ乗のりて。行ゆと海人うみびとこれをう驚おど帆ふと呼よぶ。其その
 皮かわ較くら甚た堅かし異國いこくの人ひとこれを冠かんおとといり。あれとて今いまも
 又また驚おどお似にく。此こゝ半天あつせんのり。嘗かつて曾ま發はらんと。それハ海水うみづ穢けれ
 泡あわもつて。海蛇うみへび駭おど水上うみづかみ小浮こぶこ。文鯨ぶんじやう魚群いさなぐらて。船ふねユこれをえる
 とたぬ。ふりく。怕おそと遠とほく慮あはりて。帆ふを收あめ。舵かじを嚴重げんじやうはして。これハ避さ
 り。准備じゆんび速すみる。これハ忽たち地ぢは傾覆けいふくする。ことハ今いまとての不祥ふしやう

悉しつく備びる。ものも。なとて帆ふをおろさる。といれ。それハ人ひとハ白鯨しやくじやう姫ひめを
 さつり。衆しゆ皆みな舌した振ふるく。驚おどれ。睨にらつ。帆ふを引ひち。とて碇いかりをおろえ
 とさる。底そこふりして。その綱つなさく。さうも。あれハ。いふ。あせん
 とて。い。周章しうしやうと。浩氣こうき也や。遙とほく後あとと。りけ。舜天丸しゆんてんわの船ふねや。や
 に乗のり著つて。回まわらう。艘ふねな。八町はつちやう礮たう犯はん平次へいじ高間たかま太郎たうらう亦また抽ひ先まへに。臨ま
 罷かし。主しゆの船ふねは。對たいす。さう。ひ。今いま曉あやり。狹霧せうきぬ。く。なら。こ。め。て。
 船ふねのゆ。く。所ところを。あ。東ひがしへ。赴おもむく。べ。船ふねの南みなみへ。流ながされ。と。お。し。
 加旃かせん何なにと。う。海うみの氣けと。の怪あやしく。見みえ。み。君きみあ。い。う。お。し。
 中なかつん。と。同どうと。為な朝あ見みく。り。て。汝なんぢ速すみが。い。あ。く。ふ。船ふね南みなみへ。漂あづ流りせ。し。お。
 疑うたがひ。し。故ゆゑい。う。お。な。れ。バ。文鯨ぶんじやう魚いさなの群ぐらり。お。お。を。り。て。足あしと。あ。れ。り。
 彼魚あつちのいさなハ。南海なんかいは。多おほし。お。り。あ。ふ。薩摩さつま海うみ深ふかを。去さる。こと。数た十じゆ里りハ。お。し。

不今華洛不推渡と。君父の仇と。清盛は粗雑と。するに。挾囊ふ
 舵をとり。愕て。剌風濤の難ふ。親子主従悉く。大魚の腹ふ。葬れまは
 天つり命なり。と。て。一年十二月。悪風の發る日あり。八月十五日。魁
 星魁と稱と。箕壁翼軫の四宿と。と。風を起と。大主と。我
 これを。あ。ざるに。あ。び。さ。の。魁。星。魁。の。日。期。ふ。船。出。し。て。み。ま。く。今。日
 不。至。く。船。よ。あ。り。と。て。も。脱。が。れ。主。従。が。命。あ。ら。ひ。や。と。い。く。人。も。其。言
 い。ま。ご。訖。ら。と。船。の。前。後。ふ。龍。あ。ら。つ。れ。て。水。の。沸。ら。る。二。三。丈。瞬。間。お
 風。颯。と。吹。來。る。程。と。め。れ。天。驟。ふ。結。滄。大。雨。盆。を。覆。と。ご。と。く。降
 そ。だ。四。方。野。于。玉。の。鳥。夜。と。う。り。て。面。み。め。ら。れ。も。送。お。その。人。は
 え。と。只。声。を。あ。べ。と。し。て。お。の。く。罵。り。勵。し。力。を。戮。して。體。臙。を。擣。り。
 命。が。ど。り。に。働。け。ど。も。風。雨。ま。ま。と。く。烈。く。て。船。も。只。管。お。跳。り。繞。り。浪

を。打。入。り。と。こ。と。あ。び。く。な。れ。が。水。を。浚。乾。き。お。違。う。衆。皆。瞑。眩。て。撲。地
 と。仙。是。舜。天。丸。の。乗。り。る。船。も。し。づ。ら。ゆ。れ。え。ん。お。ほ。つ。つ。な。さ。に。あり。と。も
 入。ん。ど。も。あ。ら。い。其。延。う。う。と。い。び。ま。ん。と。從。く。答。れ。その。め。お。く。
 吐。嗟。船。と。目。今。傾。覆。へ。う。え。え。り。ける。當。下。白。瘴。の。潮。垂。う。雨。の
 袖。を。絞。め。げ。う。り。め。足。を。踏。う。ら。め。て。声。が。う。り。と。て。御。曹。司。が。て。の
 万。死。一。せ。を。お。ご。し。傳。り。景。行。天。皇。の。四。十。年。日。本。武。尊。東。夷
 征。伐。の。折。り。相。模。より。船。出。し。て。上。総。へ。と。て。赴。れ。ま。あ。る。暴。風。か。心。地
 小。記。と。し。皇。子。の。船。漂。蕩。し。既。に。傾。覆。と。ん。と。ま。り。し。く。は。その。妃
 茅。橋。姬。命。の。宿。禰。忍。山。皇。子。に。代。り。入。水。し。て。う。せ。り。と。る。よ。う
 て。風。波。ま。地。に。軟。か。て。船。も。恙。あ。り。岸。も。あ。ら。く。こと。を。お。ご。り。と。て。君。が
 武。勇。日。本。武。尊。よ。あ。り。め。ら。れ。妾。が。心。操。身。攜。姫。不。及。と。も。此。身。を

儀として海神へ献らるる風の止ぶるやりの往ぬ夫婦の再會
 も量ぐとせとせひくし侍りつるに。讃岐院の荒神矣おはんりつじ
 ぬくし。環會多り。年耳の懶さをも語慰めて。舜天丸とりあ子
 入奉。七年が経奔眉なりて。既ふ志とせし。夫婦親子の愛惜
 哀別離苦のやかとなん。とにいにい場とせうのけねどつが
 ぬとろを捨て。君り死るもに舜天丸も辛じて脱と侍る足よま
 僕侍のなし。今のをや月の暇を多るをじ。としひも果と蹴り入ん
 とし。あふを。為朝連忙しく抱と住め。あふが心操はるること。我
 勅幼の配軍として。日本武のいあへ。比んといもかし。夫婦
 りあとも死る死るん。兼忽の拳動もあ。と理を述とせめ
 多人の白燈と。とあり。涙を押し。このこと。一語の情の

絆とあつりのか。妾續岐小のりし。新院面あり。けらあし
 多のり侍り。汝亦夫婦の縁。既ふ従とれども。その志の切あをり。と
 下ふびの環會とせし。これいあへ。比夫よあ。又い。行もさ。離別
 せん。努く。とつる。つる。と説示。あひぬる。ハ。あ。の。り。あ。け。ら
 り。か。れ。る。の。君。も。あ。ひ。當。り。あ。れ。お。と。め。あ。の。い。と。理。は。源。家
 氏の太神男山正八幡肥後國。其誌す。阿蘇の明神。つれて。讃岐
 院の荒神矣。哀愍。又納の睦を久し。八丈龍王感應。あて。良人を
 せ。め。松。中。の。黨。ハ。さ。り。つ。子。の。松。も。急。あ。い。僕。の。つ。え。ゆ。ま。せ
 多く。高。中。に。祈。請。し。つ。と。め。られ。し。袖。あ。り。拂。ひ。淵。を。披。と。て。千。尋
 の。底。へ。身。を。跳。ら。し。て。没。あ。め。あ。れ。と。う。好。と。最。期。あり。あ。れ。ど。も。風
 雨。ハ。ま。は。止。じ。て。海。の。鳴。音。凄。しく。松。の。鞠。を。蹴。る。ごとく。高。く。揚。り。て

半天不至り。或は傾けおちりて浪よりも低く。沈むもやうに深ゆや
 せし餘人の郎黨の白徒入水あまめといふも。後不應るたをこそ。今
 はうとまひとえ後おちりて。やうやくに身を起し。吾們木原山お
 ちりつえしより以來。命は君おたてまつりぬ。倘琴高が鯉も跨り
 列子ガ風お御うおあつげん。脱ともあまづくのおぼえ。誘多人死出
 の先登つるるるを。しといひも果ぞ。おのく刀を引抜て。或はこじ
 らぐ。或は腹うた切り。膝より附隨て。名をさおあまづぬ。其の底
 の水層と取りあまづり。為朝の目今白徒をくじめ。さ。北條人
 の郎黨が入水とる。或はそ。数回歎息し。とも清盛が運の強
 くと。為朝必死の兵士を。おて。華洛へ潜のほる。そのまゝ。這奴が
 首をひく。し。龍神と人せまつれて。おごと。平氏お荷檐とる。よ。余

運の竭るところ。世をも人をも恨し。よ。し。借老の妻を殺し。よ
 足のちひを。し。れ。郎黨をうしろひつ。り。や。かくて。あ。で。天丸
 が。ゆる。へ。う。なり。て。その生死を。ま。づ。れ。ども。今。は。や。大魚の腹中
 おめ。ん。ご。ん。ち。ひ。も。や。荒磯。は。駿の年。以。経。を。思。な。う。り。ける。の。が。
 中宿志。が。果。え。んと。それ。時。み。臨。之。風。波。お。進。退。究。了。と。せ。お。あ。る。人。も
 め。う。海。の。八。重。の。潮。踏。お。沈。ん。と。己。お。り。と。ど。お。り。と。ら。腹。を。切。ん。と。し
 ち。お。折。ら。怪。し。く。お。電。閃。れ。と。り。玄。雲。變。黠。と。船。の。上。お。天。隆。り。て。
 異類。異。形。の。天。狗。も。船。お。ま。め。つ。れ。罔。伽。を。吐。し。蛇。を。把。り。て。傷。け。り。
 母。傾。と。し。れ。松。忽。地。お。お。り。ほ。して。走。る。こと。甚。速。し。時。お。天。狗。も。異
 口。同。音。お。お。り。と。れ。八。讚。岐。院。の。神。勅。を。禀。吾。黨。と。に。あ。ら。う。と。松
 を。を。る。為。朝。卒。介。お。死。と。べ。う。と。び。夫。豪。傑。の。士。志。を。舒。名。と。揚。へ。と。する

夫を死すべしとて夫豪傑の士志を舒名と揚へとする



讃岐院の
眞助
馬朝の船を
行

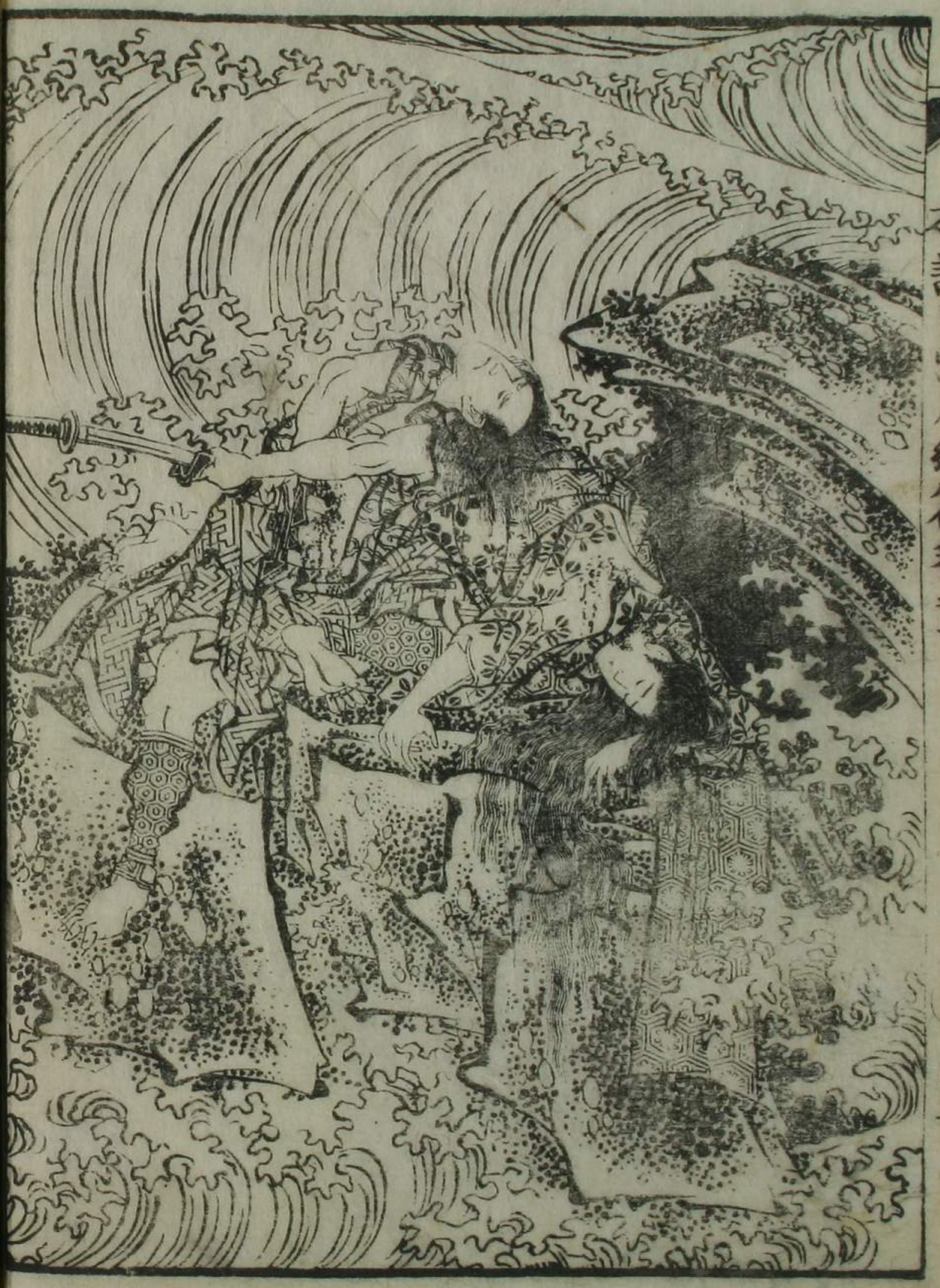
春説弓長月讀傳卷之十一



春説弓長月讀傳卷之十一

漣浪の灘なみに漂たふひ。魂たまを相伴ともく。海若うみの堂どうに至いたり。人憐あはれ。嗚呼ああ
 悲かなしむ。そが中に高間たかま大郎だいらうの。利きを我われに。壯むさ俊しんなれ。船ふねの碎くず
 我われを。磯いそ菘すと。組くみあ。波なみの底そこに沈しづみ。れが。か。く。び。も
 巖いわの上うへに。揚あげ。れ。から。う。て。死しを。脱だれ。れ。も。外あに。助すけれ。船ふねも
 死し。舜しん天てん丸まる入い水すい。あ。ま。ひ。つ。る。に。後あを。あ。く。ん。の。不ふ忠ちゆうなり。稚わ君きんの。中
 と。悔くて。か。へ。ど。り。大お殿のの。山やま船ふね。今いまも。傾か覆くわど。して。漂たひ。ま。り。ど
 ころ。魂たま魄はく。う。ら。ま。でも。守も護ごし。も。り。縦た人ひとな。れ。鳴なり。とも。恙やなく
 岸きに。よ。せ。進まり。せ。う。ん。武ぶ士しの。家いに。生なま。し。月つきの。病やて。死しま。ん。ま。本もとま
 り。ね。ど。い。ひ。ぐ。ひ。び。く。溺ど死しせん。より。吾わ妹め子こを。も。ま。か。り。て。自じ殺ころせ
 る。と。し。へ。公こう中ちゆうり。う。り。し。月つきの。身みも。あ。り。と。い。ふ。声こゑも。よ。う。り。ゆ。い
 を。と。え。ち。う。り。あ。り。磯いそ菘すの。潮うしほ垂たり。額ひたひの。髪かみを。か。き。あ。り。て。い。と。苦くるし
 夫おとこの。心こゝろ中ちゆう推お量りやうり。磯いそ菘すの。潮うしほ垂たり。額ひたひの。髪かみを。か。き。あ。り。て。い。と。苦くるし

け。小こ息いきの。吻くちも。頬ほ夫おとこの。契ちぎ縁えんを。し。く。夫おとこの。刃やいばに。か。れ。事こと過す世よあ。り。く
 結むすび。ん。縁えんと。そ。喜よろこぶ。い。と。あ。り。あ。れ。ど。遺のこ憾ごうと。この。年としに。お。ん。傍かたに
 ま。り。ど。して。給たまま。せ。し。白しろ雉けい姫ひめ。亦また恩おん高たかと。ころ。が。君きみの。い。う。ま。なり。な。ま。り
 とも。あ。ら。び。それ。え。ん。か。か。て。あ。ら。び。ち。り。傳つたへ。し。ま。る。稚わ君きんを。浪なみに。取
 る。ま。り。月つきの。後あに。真ま土つちも。て。君きみは。夫おとこ婦めかけに。舜しん天てん丸まるの。い。う。ま。なり。と
 同おなじ。ま。り。さ。こ。そ。面おもを。く。傳つたへ。し。ま。る。せ。り。て。吾わ儕せいの。魂たまに。お。ん。亡な骸がなり。り
 とも。衛ゑい備びの。舊ふるの。浦うら回わい小こ著ちやくも。か。せ。水みづ朕みづかみ人ひとの。ま。を。借かり。て。葬あなじ
 ち。り。般はん若じやくの。航かうに。乗のりか。え。り。彼かの岸きに。登のぼり。ま。り。世よに。あ。り。と。れ。の。教くわい
 とも。て。憂うれあ。り。れ。ね。吾わ們らも。忠ちゆう信しん郎らう。我われを。人ひとも。あ。り。と。れ。の。竭つえ。ん。と。い
 ひ。傳つたへ。り。の。况いは今いまも。昔むかしも。例れいと。く。那なも。名なも。あ。り。つ。れ。そ。い。ま。小こ姫ひめ君きみ
 の。心こゝろ烈れつと。女にの。か。こ。そ。と。闇くらに。処ところを。照てし。ま。る。神かみも。仏ぶつも。あ。り。あ。ら。わ。





半身を水のしりあはしつ。その赫変とれりの彼が眼の光るあてを
 ありりれ紀平次のそれをこころ大に驚き。嗚呼うが主従この悪魚の腹
 を肥さよ。腰刀の佩られども。稚君の抱とまりて。いりてうさやんと殺
 びんばや殺しけりとも。外に援れりのなれど。とても活ぶたさも
 あらぬ。お怖うことうのと。あつくもあひとえ。おれも中へん退さもせど
 ぬとの浪間へ。おどに悪魚を忽地紀平次をえん。崖おひに死
 ねた。お剣を裁うと。おれに歯をあはし。潮を蹴うて。こころ
 ある折しも。おれ高間夫婦が形體。煙のことく。まあられ。俄頃よ二ッ
 の燐火と。おつ。悪魚の口お入ると。こころえし。怪しう。お眺む。お悪魚の
 猛お用なる。お波を潜りて。紀平次を被さ。あげ。中を。お上
 小助乗して。走る。お船も速うけり。紀平次をこの形勢と。おん。

つづくことし観けら。痛しけうの舜天丸と。いのの経ふう鮮切らう。こ
 へとむらうらら驚き。慌しく懐よりかた出して声を惜まほひ泣れど。
 磯馴松風岸らう浪の外あ終るいくな。砂おはじる貝のうらふ。
 昨夜の雨の溜り水を。いろそ変る唇お。し傾けても令せせも。
 咽喉あら下らでさかかくふ。落るおのが涙なり。まがくくちて目
 押拭ひ。かくあるべき事おづら。大魚の奇特あうりとも。憑ひひ
 なうこれひとり。存命て何えせん高間夫婦もいと恨めし。さひの八千
 遍百千遍縦一年二箇月泣バとて叫べがとて。後果多し。魂の猪を。
 撃たぬべ術のあらび。抑らう何國ぞや。人住む嶋とくええねとも。
 せめて亡骸を瘞せらわらせ腹うら切て三途の川も。死出の山路も紀平次
 が。肩を越る人。俵も人。さへがこれのじりやう。主従の縁清うれ。之世

の宿因違つごの導れま入地荒尊。南無阿弥陀佛と念ぶつ。瞻仰
 視とび嶋山の。高峯まかたあ。雲も夢の迹なれたら。ごさひ
 かつらぬそのの。朝日のかた故郷と。あみのこめて目みかた
 ぬ。木の子草花芳しく。人おそれぬ鳥の声。耳置いた瀧津瀬
 の外お訪へ。と家もさし。浩処も。峯吹おろと風のまもく。幽ま
 ゆれ。讀経の聲も。紀平次と耳次側と。あま不審し。人もかよらぬ
 荒磯も。潮垂衣苔ひ。行ひとまのりのありとら。こハ仙人の崖
 宅なるべし。侍人。巨海の外お十の洲あり。人迹の希後さる。ここあ
 して。その中も神仙あり。丹を煉。真火終し。天地ともおま。詩一こ七
 所謂徐福が不老不死の薬と求る。といふ説も証なきし。まじまじ
 ぞハ。観音大士のおかし。まを。補陀落山あやあ。んぞ。ん。か。の。仙

境小入りぬるこそ幸なれ素ゆきと縁由を愁訴し、天奇回陽の茶
も駿なり。推君の命数とて場あかきも因果の道理を聴かせ
さひよるよとがらもかたぐく。隨獄の苦患を脱して天堂に生
まらんあへるが活延てこの嶋小漂ひも、そのうひあり。あ
かりあがり。と云うところ。その使屍を抱とわけ。読経の声を公
あてふ。うよみ路なれ磯山を幸じて松柏の巖小縁に、赤光の洞
を繞りつ。攀登れば天風地小觸りて、紫蘭の室に入り。うよみ
彩雲天小遍して春花の林は、拵なり。向うは、数千仞の阪登
路滑み。直下せむ十万里の波濤。天小繞り。さうし、二三十町
登り、身つらん。と云ふ比、白鹿木立の間より走り出。紀平次が前
あがらて、御導とされお似たり。とて至る。紀平次の體猛は軽く

おほえと。須史の間、山巔より登果。と云ふれ、お似りの老翁、紅帽以
載れ、鶴裳を被て巖の上小端坐せり。その形容、顔は長くして身は、
眼秀眉鬢白く、童顔仙骨なり。紀平次もその神仙なるべ
ありて、只顧み、驚嘆し、巖の下小踞りて、終を讀をうと、身小
あじありて、老翁を、あうみ、経巻をすれかき、とて、紀平次は、や
と、對ひすこゝて再拜し、神仙ねがりのこの小児を活し、人活し、人
と叫びたり。老翁は、これを、あうみ、莞尔とうち、あはれ、八町、
紀平次、太夫を抱と、これ、辰子。八郎、曹司の子、舜天丸、か、びや
近く、あれと、その、聰察、あ、視るが、おと、なれ、紀平次、い、
こゝて、この、風波、の、小船、を、破られ、と、漂泊、あ、れ、一、五、十、
れ、お、老翁、うち、魚頭、汝、や、常、言、あ、も、苦、中、の、苦、を、喫、して、人、の上

草蓆クサシは、
ミカサにて
作ては、方
り、琉球リウキウ
てこれ

黒木クロキ又鳥
木キとも書
その木キは桂
の木の中
に黒し、白
木のあり

又赤木アカキの
ありこれ
赤木アカキとも
又紅木ベニキ
あり

七ツの島あり。第一を太平山と名く。じり宮古と稱ふ後迷古と呼べり。
その後終ふ詔りて麻姑山といふ是なり。此嶋中山の南二百里あり。
その中は荒山と呼ぶ山甚高し。山の上平瑠石於亭あり。山の周囲五
六里なるべし。五穀牛馬多し。棉布麻布草蓆を産さ。又紅酒を醸
造とこれ。太平酒と名く。第二は伊奇麻と名く。太平山の東南
あり。第三を伊良保と名く。太平山の西南あり。第四を姑李
麻と名く。太平山の正西あり。第五を達喇麻と名く。太平山正
西あり。第六を西那と名く。太平山の西南あり。第七を鳥噶弥
と名く。太平山の西北あり。以上の七嶋を國人へなきて太平山と稱ふ。
亦西南ふ九ツの嶋あり。第一を八重山と名く。一名北木山。太平山の
西南四里あり。中山を去ると二百四拾里。檜木黒木赤木あり。

草蓆牛馬螺石麻布棉衣海參貝産と紅酒を醸す。草蓆は、
琉球の産物なり。珠璣珊瑚瑠石海松海芝海栢松紋ホレ奇石
五穀の産物なり。瑠石珊瑚瑠石海松海芝海栢松紋ホレ奇石
あり。第二を鳥巴麻と名く。八重山の西南あり。第三を波渡川と名く。八
重山の西南あり。第四を由那姑呢と名く。八重山の西南あり。第五を
姑弥と名く。八重山の西あり。鳥巴麻以下の七嶋は較て此島少許大
なり。第六を武富と名く。八重山の西あり。第七は父里嶋と名
く。八重山の西の方。少北は當れり。第八を新城と名く。八重山の西あり。
第九を波照間と名く。八重山極西北あり。以上八の島を國人は皆
八重山と稱ふ。總三十六嶋。琉球の属嶋なれども。往來自在なるは八
これを審みたるの稀なり。汝記憶して忘るるを後かゝるる用。衣
とこのあかん。この兒や。父母不別と。かゝる孤島。漂泊と。といへども。

年十三四及之。その侍侍りて。切業成奥とてし。世もかくも
 老く。これを養育。時の至れをりて。この嶋五穀成生せし。山に仙桃
 のりて。四時小果を結べり。これを食ふ。飢を止して且命長し。夫習性
 多れ俗。氏より三月といひ。人の賢愚を初とて。これ教るし。教るに
 其の教を。今よりこの児。武藝を習し。文字を教る。其の教を。其の
 せよ。これ小一巻の兵書あり。これ八是。往昔八幡太郎義家朝臣江師
 匡房郷より傳授の秘書也。して源家小干て。最珍重とて。其の心
 志。これ平治の播乱。義朝これを懐也。尾張國に落没し。
 長田小野を。後この書野人の手。小落る。これ彼地。小遊歴也。
 日購ひ。これ舜天丸。小附属とて。又この山。南を谷間。小
 あり。この桃あり。素也。東へは。これ枝。小物。のこれ。これ。

これなりと。猪し。その枝を剪て。之條の征矢。別第一の矢。伊勢
 大神宮と稱。第二の矢。成男山正八幡と稱。第三を阿蘇明神と稱。
 主從且暮。は祈念せん。その矢。毒龍邪鬼を征して。其驗響の物
 其意。これ如らん。これ桃。と仙木也。して。百邪を征。を往古異朝
 黃帝の。これ神荼鬱壘といふ。兄弟あり。性よく鬼を執。黃帝桃
 板をりて。彼兄弟が。板を画せ。これを門戸。小貼く。惡鬼を禦。今
 の桃符。桃版。とて。その事なり。又漢の時。西王母。二千年
 小下。小び子。小婦。小桃をりて。武帝。進む。この外。桃の德。枝。拳。小皇
 の。これ。これ。主從。命を撃。ぐの糧。これ。小。小。の。や。これ。此
 嶋を。舜天丸。小。今。より。他所。移。了。任。らん。一旦。袂。を。分。と。い。む。
 時。至。は。再會。の日。も。これ。下。疑。へ。懈。了。懈。了。是。事。成。ら。ん。よ。く

勉よと説示し件の兵書と舜天丸ありにいつ。扛揚とさし切こふ。
 紀平次と抱きとつてまじりて飲ぶ。神仙の教誡いふやう疑ひもあらん。
 只とつめりとなれば、為朝夫婦のうくなり。その往方をあじしめりしと
 叮嚀も請問む。老翁答く。彼夫婦の事と告るが。その志と折よ似
 たり。汝もあつてあるとあり。この同どもあれしどりのを。あは推え
 る。同人とすれとれ。老叟へつと身を起して袖うらとて入る。白雲聳
 然とて巖の下より起す。老叟を引裏つ。半天よりち升りて風お
 靡きて失せけり。紀平次とこの形勢あつてとて奇異の多ひをば。
 あじしめりて伏おがこ。遂に舜天丸を扶掖す。東の谷蔭あむむ。
 果して桃の林あり。物ほし折りて。その果二つとらちおとす。二つは
 舜天丸も進らせ。二つはこれを食べあふ味蜜のこと。只二つは

腹も満主従の氣力日よふ百倍せり。かくて教られり木の下の
 と。そこを彼処くと索れほど。老樹の枝も黄金の牌は、結ひ下
 そのほとりも白丸鳥の羽五六枚あり。さればとて彼牌とえれを康
 平六年三月甲酉源朝臣義家放馬と彫つけられ。紀平次へ半
 と覚り。半の訝す。忙しく件の牌とつて押戴す。稚君これと傳
 説せよ。これみん昔時前九年の合戦果て後義家朝臣亡者追福
 の為あつて。野の鶴を放りひねとら。標の札も疑ひはし。その鶴一
 隻又往小本綿山あり。嚴君八郎の曹司も再生の恩を禀し。あり。
 志が美奇を示せ。そのあり。既ち稚君の誕生し。あつれとれも白鶴屋の
 棟を翔りて。ね夫鶴の仙禽にして鳥の聖と稱せられ。齡千六百
 年にして飛びて定まり。白けは雪のいろ。黒たれば漆のおとし

常言云鶴の仙人の驥なりとぞいふる。年八百冊して是奇也。其の
 千載にして神變彊ひし。つゞく縁故を考れお彼老翁と八幡殿の
 放多しれ鶴冊して。曹司の為。再生の恩を報ぐれり。彼亦彼
 持し衆く。九霄お飛行とれし。福祿壽星なり。我楚とる。ひ
 定めがごとけれと。皆君の陰徳に。かぶじて。こ。小陽報の
 水こそ。今何を。敷た。侍人。終る。父上母上。おし進。つれ
 りの代。といひ慰。お。舜天丸。年。た。り。も。お。と。ま。あ。く。よ。く。其。意。を
 ほ。り。けん。父。も。母。も。慕。ひ。め。め。と。慰。ら。る。稚。子。より。慰。は。し。袖
 の。雨。木。を。急。の。雲。は。紛。ら。し。つ。紀。平。次。へ。彼。挑。の。枝。を。剪。ら。ん。く。矢。お
 造。る。再。件。の。多。れ。羽。を。剋。鹿。の。角。と。拾。ひ。て。鍔。と。し。黄金。の。牌。と。幣
 と。して。三。社。の。神。お。祝。祀。了。挑。の。古。木。の。塵。と。り。り。と。内。に。立。並。べ。く

祈念を凝し。又舜天丸。武藝を教る。を。月の。勢。と。或。と。他。代。神
 曲。く。う。と。或。ハ。野。駒。は。木。の。皮。を。糸。綱。と。して。騎。射。遠。射。を。習。は。し。又
 あり。と。死。ハ。砂。跡。つ。けて。文字。と。字。と。れ。お。聰明。唐。悟。傳。な。く。年
 十。支。子。及。へ。つ。比。あ。は。よ。う。つ。の。所。為。紀。平。次。お。立。ま。さ。り。彼。兵。書。を。諳
 ぶ。く。發明。と。れ。と。と。多。う。り。され。を。主。徒。只。二。人。姑。巴。嶋。お。五。七
 年。の。月。日。お。あ。ら。う。お。鹿。の。皮。を。衣。と。し。鳥。の。羽。を。令。衣。と。し。夜。ハ。崖。宅
 の。内。に。卧。し。昼。ハ。磯。方。お。千。香。友。と。し。朝。多。く。海。より。出。る。日。お。我
 えて。も。故。々。の。な。り。し。け。と。バ。舜。天。丸。と。三。筋。の。征。矢。を。伏。お。ぐ。も。今
 一。と。び。父。母。お。あ。し。し。お。人。と。祈。り。つ。主。を。家。隸。と。ら。う。と。し。家。隸。ハ
 主。を。養。育。と。れ。お。惜。ぬ。身。と。存。命。る。胸。苦。さ。ら。い。つ。あ。り。け。お。お。ひ。お。お。も。衣。と。

椿説弓張月續編卷之一畢

